

SOCIAL WORKERS

社大OB・OGがつむぐ福祉の絆

12月

2018 Vol.16

Interview 1

小林 岬さん

相模原市社会福祉協議会
福祉推進課 地域支援係



Interview 2

羽毛田 優さん

東京都社会福祉協議会
東京ボランティア・市民活動センター



地域の
民間福祉を結びつけ、
問題を解決する

社会福祉協議会は、高齢者や障がい者など、
「困りごと」を抱える人たちを支援する地域福祉
の中核となる民間団体です。
ここで働くソーシャルワーカーをご紹介します。

2008年3月
社会福祉学部福祉計画学科卒業

一筋縄ではいかないのが「福祉」 いろいろな人と役割分担しながら、 社会の役に立ちたい

は け た す ぐ る

羽毛田 優さん

社会福祉士

東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター

PROFILE

1986年 千葉県出身
2008年 社会福祉学部福祉計画学科 卒業
2009年 東京都社会福祉協議会 入職
2017年 東京ボランティア・市民活動センターに配属

隔月で発行している、
ボランティア・市民活動を
広げ、応援するための
情報誌です。



東京ボランティア
市民活動センターの
入口



高2の終わりに進路変更。 福祉の道へ

大きな身体にメガネの奥の優しそうな瞳が印象的な羽毛田優さんは、東京都社会福祉協議会に勤務して10年目になります。福祉の仕事にふさわしい包容力を感じさせる羽毛田さんですが、当初の夢は教師になることだったそうです。

「ところが、高校2年生の終わりに突然、友人を自死で亡くしました。このことが大きな方向転換のきっかけになりました。友人だけでなく残された遺族の方に接して、心に悩みを抱えて困っている人の役に立てる仕事に就きたいと考えるようになったのです」

すでに方向性が決定している時期でしたが、進路変更を決心。先生とも相談して、福祉系大学の中から日本社会事業大学をめざしました。

入学後は、当時学部長だった大橋謙策教授の『地域福祉論』の授業に大きな影響を受けたといいます。「地域の中でできることをするという福祉のあり方に興味を持ったことは、いまの職場につながっています」。

また、大学入学後に母子生活支援施設の夜間警備のアルバイトも始め、翌年には「障がい学生支援組織CSSO」の立ち上げメンバーとして参加しました。「今では大学の中に支援組織ができていますが、まだそのころは学内の障がいのある学生をサポートする体制が整っていませんでした。基礎となる組織で活動できたことは、このあと福祉の仕事に携わるうえで大きな経験になりました」

さまざまな経験が仕事に生きる

授業の一方、福祉の現場で積極的に経験を積んだ羽毛田さんでしたが、就職したのは意外にも一般企業。営業マンとして教育関係の教材を販売する仕事に就きました。しかし、人の役に立ちたいという思いが強い羽毛田さんは、営業優先の考え方の違いから上司とぶつかってしまいます。

「いま思うと本当に考えもなくしてお恥ずかしいのですが、勢いで『辞めます！』と言ってしまいましたが一般企業で得た経験は、今も仕事に役立っています」

福祉の施設・団体には、羽毛田さんの所属する社会福祉協議会や子どもたちのための児童養護施設、地域に住む高齢者や障がいのある方のための地域包括支援センターなど、さまざまな組織があります。

「福祉は一筋縄ではいきませんから、役割分担をしながら進める必要があります。そのためには、いろいろな立場の人を理解してつながりを大切にするコミュニケーション能力が必要なのです。その意味で企業への就職経験は貴重でした」

出会ったすべての人たちが財産

東京都社会福祉協議会に入職した羽毛田さんは、1年目は婦人保護施設、母子生活支援施設、乳児院。2年目から3年間は乳児院と児童養護施設、自立援助ホームを担当しました。その後、福祉職員の福利厚生に関する部署に配属され、退職金の給付や福利厚生事業の企画などを担当しました。また、2年前には生活福祉資金という低所得者向け貸付事業を行っている部署に異動になりました。「こうした経験は、都内に住

む市民が抱える福祉的な課題や生活の実状、そしてそういった課題を解決するために働く支援者のことを知る貴重な機会となりました」と羽毛田さんは言います。そして、昨年3度目の異動で現在の東京ボランティア・市民活動センターに配属になりました。

人とボランティアをつなぐ役割

現在の仕事は多岐にわたっています。「ゆめ応援ファンド事務局」として、相談に来る非営利団体に助成をし、助成をした後も定期的にやりとりして活動を支えたりもします。また、中学校の教職を志す学生の必須科目である『介護等体験』では、学生たちの実習日程の調整、学生たちの前で講師として立って、初めて社会福祉に触れる学生へ福祉の施設で体験を行う上での注意点や持つべき視点、どういった事前準備が必要か等のガイダンスも行っています。

時期によって忙しさに差がある仕事を抱えながら、羽毛田さんが精力的に取り組んでいるのはホームページの運営をはじめとする、東京都内のボランティアや市民活動の情報収集と情報提供を担う仕事です。

一般市民の方が「何か人の役に立ちたい。ボランティアをやってみたい!」と思ったときに、その人の得意分野や使える時間に合ったボランティアがどんなものなのか、経験がなければ途方に

暮れてしまうかもしれません。そこを橋渡しするのが羽毛田さんの仕事です。

「昨年担当になって取り組んだのは、ウェブサイト『ボラ市民ウェブ』を外国語対応にすることでした。このウェブサイトでボランティアの種類や地域などを簡単に検索でき、空いた時間で無理せずにできるボランティアを探すことができます」。

たとえば大きな災害が起きたときに、助けたい一心で勢いだけで被災地へ出かけてしまい、準備不足のためにあまり役に立ってなかったり、体調を崩したりする人もいます。

「何かを始めたいと思ったから、まずは自分の住む地区のボランティアセンターに相談してみることをお勧めします」と羽毛田さんはいます。

羽毛田さんたちセンターの職員は、訪れた人の話をじっくり聞き、だれかの役に立ちたいという気持ちとボランティアの橋渡しをしています。そのボランティアがよい経験になって長続きできるためのサポートもしています。

「今後の課題は、センターのレイアウトを工夫して、だれでも利用しやすい場所にあることです。たとえば車椅子の方が通りやすいようにとか、障がいのある方が訪れやすいようにと知恵を絞る毎日です。より多くの人に気軽に訪れてもらえるようなオープンでウェルカムな雰囲気作りをめざしています」

大学時代はやりたことをみつめる時期

福祉をめざす高校生へのアドバイスを伺うと、「大学に入ったからには勉強が大切なのはもちろんですが、同時に、学生時代は好きなことに取り組める4年間であります。なんでも気になることがあったらチャレンジし、仕事以外にも一生懸命でできる好きなものを、一つでいいので見つけてほしいと思います」

羽毛田さんも授業やアルバイトのかたわら、ボランティアやソフトボール、混声合唱などいくつかのサークルでも活動していました。なかでも混声合唱は、在学中に学校から飛び出て、地域の社会人のアカペラサークルへ参加するまでに発展。現在もいくつかのアカペラグループでリズムの担い手である「ボイスパーカッション(ボイパ)」パートで活動しているそうです。

「仕事で悩んだときも、いろいろな職業の仲間と話すことで解決に向かうこともあります。なによりも、壁にぶつかったときに好きなことがあればリフレッシュして、また課題に向き合う力が湧いてくるんですよ」と羽毛田さんは笑顔で教えてくれました。

今では仕事に加えて趣味を持つことの必要性を実感しているそうです。いろいろなことにチャレンジして全力でやり切った羽毛田さんならではの言葉なのか、かもしれません。

コミュニティソーシャルワーカー(和製英語:Community social worker、略称:CSW)とは?

人間関係が希薄な時代、その必要性に注目が集まっています。今回お話を伺った小林岬さんの役割である「コミュニティソーシャルワーカー」について説明します。

Q1▶ コミュニティソーシャルワーカーとは国家資格ですか?

A1▶ ソーシャルワーカー(社会福祉士と精神保健福祉士)と混同されることがありますが、国家資格ではなく、専門職といったほうがいいでしょう。現在は、まだ国の制度に位置づけられておらず、各地方自治体が自主的に配置しています。都道府県レベルでは大阪府が最初に2004年に導入したのがはじまりです。配置されている機関は市町村によってさまざまですが、多くの場合、社会福祉協議会や高齢者施設に在職しています。

Q2▶ どんな役割があるのでしょうか?

A2▶ 現代社会では、人と人との関係が希薄になっており、地域から孤立して必要な支援を受けられない人が増えています。また複合的な問題や制度の狭間の問題を抱えた世帯もあります。コミュニティソーシャルワーカーは、既存の専門職では対応しづらい生活問題を抱えた世帯に寄り添い、さらに地域から孤立したり、排除されることがないように、その世帯と地域を結びつける役割を担っています。小林さんの勤務する相模原市社会福祉協議会では、支援が必要な人に福祉分野をこえてサポートするために配置されています。

Q3▶ 具体的にはどんな仕事をしているのでしょうか?

A3▶ 支援が必要な人たちを支えるための見守りや地域とのつながりを作るためのセーフティーネットの構築を担っており、地域から孤立してしまいがちな人々への支援を行っています。既存の公的なサービスや地域の支援では対応できない対象者に寄り添い、問題解決に向けて一緒に考える細やかな対応もしています。生活支援が必要な人から寄せられる相談への対応や必要な福祉・サービス利用申請の支援、地域との住民活動への協働支援なども行います。

地域の皆さんの想いを大事に、 孤独な人をゼロにする地域づくりを目指す

2013年3月
社会福祉学部福祉計画学科卒業

こ ばやし みさき

小林 岬さん 社会福祉士

相模原市社会福祉協議会 福祉推進課 地域支援係

PROFILE

1990年 東京都出身
2013年 社会福祉学部福祉計画学科 卒業
相模原市社会福祉協議会 入職
2016年 地区担当の専任になる



相模原市
社会福祉協議会
マスコットキャラクター
にこまる

小林さんのある日

(日によって業務内容は変わります)

8:30 仕事開始
朝のミーティングでは各地区担当の訪問や打ち合わせなど1日の予定を確認
9:30 地域のボランティアグループが実施する定例会へ出席(月1回)
話し合いの場に参加し活動内容を把握し、必要に応じて情報提供などを行う
12:00 昼休み
13:30 担当地区の地域包括支援センターに出向いて職員と打ち合わせ
15:30 事務所に戻り会議資料や報告書などを作成
17:15 勤務時間終了。この日は担当地域の会議のため残業
19:00 地域住民が主体となつて行う会議へ参加
21:00 会議終了。片付けて帰宅



地域づくりは信頼関係から

小林岬さんは相模原市社会福祉協議会に入職して6年目。子育て支援(ファミリーサポートセンター)とボランティアアセンタを経て、2年前からは地区担当専任になりました。現在は、コミュニティソーシャルワーカーとして、個人の支援を通じて地域づくり、地区社協(社会福祉協議会)の支援業務などを行っています。相模原市では22地区ごとに地区社協を組織し、住民の方々が地域福祉のまとめ役として福祉活動を展開しています。

「地区社協の方たちと連携して地域づくりを支援していくには、皆さんの想いや悩み、課題など本音をお聞きすることが大事です。そのためには、地域の会合などにはなるべく参加し、お互いに想いを言い合えるような顔の見える信頼関係づくりを大切にしています」

「孤独な人に何かできることを」の想いから福祉へ

小林さんが福祉の仕事をしたのは、高校生の時に高齢者の孤独死のニュースを見たことでした。

「地域の中に、ひとりで亡くなり何日も発見されない人がいることにショックを受けました。寂しい思いを抱えながらも人とつながる機会を失いひとりで過ごしている人に対して何かでき

ることはないかという想いから福祉の道をめざしました」

いくつかの福祉系学部を訪問する中で、オープンキャンパスに訪れた小林さんは小規模で温かい校風に触れ、日本社会事業大学の福祉計画学科を選びました。

大学時代の経験が今の仕事につながった

「入学してみると、期待した通りアットホームな校風でした。それに、ゼミの授業の中では福祉の職場で働く先輩がゲストスピーカーとして来てくれたり、清瀬市の社会福祉協議会の方と赤い羽根共同募金に参加したりと、身近に福祉の現場に接することができました」

また、在学中は『ボランティアサークルHi-HO!』に4年間所属していました。

「障がいのある方々と一緒に出かけたリ、レクリエーションをする活動をしていました。想いのあるメンバーが集まっているからこそ運営への考え方も様々で意見の違いから話し合いを必要とすることもありました」

そのような相手とも話し合いを重ね、あきらめずに伝える努力をする……。そのようなことを経て、よりよい活動を目指していく方法を学んだそうです。

そして卒業を前に、当初は高齢者支援を行う地域包括支援センターへの就職を考えていた小林さんでしたが、「あなた一

人だけではなく周りの人と一緒に作り上げる仕事はどうだろう」とアドバイスを受けたことが、社会福祉協議会に目を向けるきっかけになりました。

地域の人の想いや信頼関係を大切に

こうして現在、コミュニティソーシャルワーカーとして孤独になりがちな方々の支援をしていく中で、地域でのつながりの大事さを改めて痛感し、高齢者が集うふれあい・いきいきサロンや子育て中の親子が集う子育てサロン、子どもたちの無料学習支援やこども食堂など地域の中で徒歩や自転車などで行くことができる居場所づくりの充実を目指して活動しています。

このような取り組みと一緒に担っていく地域包括支援センターなど専門職や民生委員・児童委員、住民の方たちは、「困りごとを抱える人の役に立ちたい」という想いをそれぞれに抱いていて、「いろいろな想いに触れること、本音で相談できる相手がいることで、壁にぶつかったときにも自分の支えになり、日々の仕事の原動力になっています」と、小林さんは笑顔で語ってくれました。